0. 報告日：2012 年　4 月　5 日（木）

1.訪韓期間と場所：2012 年 3 月 25 日（日 ）～3 月 31 日（日 ）、韓国：ソウル・江陵等

資料作成者	（所属、学年） 大分大学大学院工学研究科 建設工学専攻博士前期課程 1 年 （氏名） 樋口　夏希	**2.交流・調査の着眼点** 「自然要素と人工物の織り成す景観」 前年度研究を行った「風水景観研究」では、地形と人の営みによる景観の特性を明らかにした。両者の要素が合わさることで生み出される景観とはいかなるものか。その良し悪しを今回は注目して考察していきたい。

3.調査記録（7.5 頁程度）

■2012/3/25　清渓川

清渓川の製造計画を視察した。清渓川の製造に対しては国民の反対が多かったという情報を耳にしていたものの、実際に視察をしてみると予想に反して綺麗に整備されており、川を目当てに訪れている人々が多くみられた。建設地は、元々道路が通っていた場所を整備したものであり、道路の中央（3 車線ほどの広さ）を掘るような形で川が造られていた。道路の中心に配置されているところに注目すると、大分の遊歩公園と要素が似ているようにも感じられた。周りの店などは、この川の製造にあたって規制がされているとのことで、看板などの大きさが小さく、色の規制もされていた。道路から下げてつくられており、道路に挟まれているという感覚がほとんどないことや、ゆっくりと歩けるスペースが確保されていることから、来ている人達も穏やかな時間を過ごしているように感じられた。

写真１　清渓川前面より

都市の特に中心部では、自然を感じることが出来にくくなっている現代の造りの中で、この清渓川の計画は大きな役目を担っている気がしてならない。こんなに大規模ではないにしても、水や緑、土といった自然要素を取り入れていくことがこれからの都市計画で大事なのではないかと、今回の視察では強く感じた。また、「人工の川」というと聞こえが悪く、あまり良い印象を抱けない人もいるだろうが、今回の視察で感じたのは「人工物であるが故に生まれる良さ」というものだった。この清渓川では、流水口がいくつかに分かれており、その水の流れによって水音が生まれ、水に動きが生まれていた。これはただ単に溝で流れている水とは違う印象だ。私自身、この視察に行くまでは、人間の手が加えられた自然というものに違和感があったのだが、自然要素に人工の手が加えられることで織りなす風景、また、その良さというものをこの場所では改めて感じた。このように、自然と人間、二つの全く違う要素が上手く交わる都市計画というものを今後はしっかりと考えていきたい。

■2012/3/25　景福宮

昔の王族が住んでいた宮殿を再建した景福宮。ここは昔日本人が植民地化していた際に別の建物をたててしまっていたそうだが、その建物を１４年前くらいに取り壊して造り直したとのことだった。このような話を聞くと、日本人の昔行った行為を忘れてはいけないな…と感じる。この宮殿では、特に、主山とのコントラストがとても印象的だった。

風水の理想的な地形の一部として、主山というものが存在する。集落の背後に大きくそびえる山の事だ。右図を見ても分かる通り、建物の奥に大きくそびえる山が一つ、しっかりと視線に入り込む。この山という自然要素と宮殿という人工物の調和が、とても好印象を受けた。もちろん、この宮殿のみでも、その建設技術と造形美に圧倒されたに違いない。しかしながら、その背後にそびえたつ立派な岩山が存在することで､その地の地形と建築物に一体感を与え、一つの壮大な風景となる。この場所は風水理論を利用し、造られたと聞いているが、このように、風水を取り入れた場所に現れる風景とは、自然要素と建築物により織りなされる景観だと私は考えている。二つの要素がお互いの良さを引き出し、調和をはかる。その可能性を風水という理論に私は感じている。

写真２　景福宮と主山１

写真３　景福宮と主山２

■2012/3/25　南山タワー

タワーから見下ろしたソウルは、日本の東京などとちがい、山が中心に配置してあるかのような造りをしているように見えた。大きな山脈が都市のすぐ傍にそびえたち、高いビルだけで埋め尽くされる都市とは違った景観をもっていた。このように、自然と密接する形で都市が配置された場所というものは日本ではほとんど見ることが出来ない。この場所でもまた、風水との関連性を強く感じさせられた。

写真４　タワー上から見た風景

■2012/3/26　I park

河川敷を整備し作られた公園 I park。道路と垂直に作られたこの公園は都心から少し外れ、静かな空気が漂っており、訪れた人々は散歩を楽しんでいた。中心に流れる川の向こうに見える高層ビル。良くも悪くもこのビルがアイストップの役目となり、河川敷との不思議なコラボを成している。ビルとの距離が遠い為、圧迫感などを感じることはなく、写真５のように少し離れた場所から眺める高層ビルは少し違う世界のようにも見える。不思議と違和感や不快感はなく、異種の織り成す新たな風景として面白く感じた。しかしながらこの風景は距離感が大きな影響を与えており、その点をしっかりと考え計画しなければならないように思う。

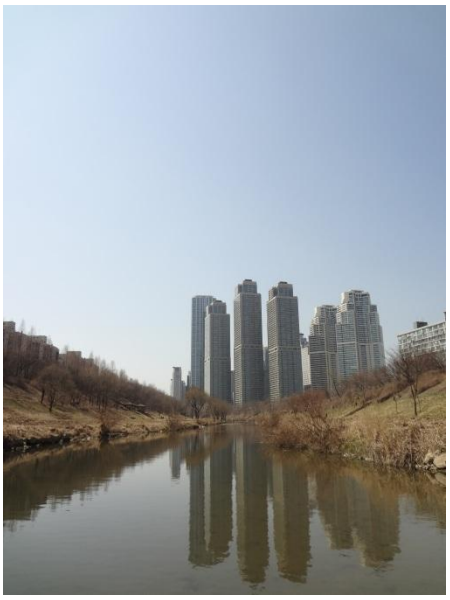

写真５　河川の奥にそびえたつビル

■2012/3/27　船橋荘

船橋荘では「昔、ある男が狩りに出て、見つけたイタチを捕まえようと追いかけていった。ふと気がつくと知らない場所に辿りついており、その場所がとても綺麗な場所であった為、男はその場所に家をたてた」という話があるそうだ。船橋荘の入口にある東屋「活来亭」（写真６）は、蓮の花が植えられた人工池の上に建てられており、池にかかった赤い橋などと合わせて眺めると、まるで桃源郷のような雰囲気を醸し出している。前記の話の内容を考えると、初めてこの地を訪れた男は、その土地の美しさに理想郷や桃源郷のようなものを感じ、建築物にそのイメージを重ねたのではないかと感じられた。また、湖の傍に位置する、小さな林に囲まれたひっそりとした空間。静寂さに包まれた船橋荘はその空間のイメージを壊すことなく、むしろ自然を生かす造りとなっているように感じた。人の手によって整備された庭や池。それらを囲むように残された小さな林は、建築物と人の手によって造られた自然を調和させる媒体のような役目になっているのではないだろうか。

写真６　東屋「活来亭」

写真７　舎廊棟

■2012/3/28　三亀亭

安東素山里（アンドンソサンマウル）に存在する慶尚北道有形文化財第 213 号の古い亭。三亀亭はこの里に住んでいた８８歳の老母のために息子達が建てた亭であり、長寿の象徴である亀の模様をもった石が３つあることから「三亀亭」と名づけられ、1496 年に建設されたものである。幾度か補修されているものの、その風貌や材木の質などから歴史を感じることが出来る建造物だ。町から少しだけ離れた丘にぽつんと佇むこの亭は、おごそかな雰囲気を放っていた。周りの静寂さと相まって、日本のわびさびと同じような感覚を感じることができた。去年の夏、韓国に研究の調査で見てきた新しい亭では、ガラス窓がついたものや、六角形の東屋が多かったのだが、それらの亭とは違い、木組みだけでつくられており、その木の温かみを感じると共に、歴史を感じさせられた。その三亀亭からの眺めは田舎の美しい景観をみることが出来、何気ない周りの風景がどこか懐かしさを感じさせるような不思議な感覚であった。山中冬彦氏により執筆された「落の亭と景―韓国安東市素山里三亀亭と八景―」に、この三亀亭からの眺め（八景）に関しての記述がされているが、この場所に実際来ることによってその素晴らしさを実感することが出来た。また、近くに植えてあった風水樹（当方は亭の近く植えられている大きな樹木を風水樹と呼んでいる）はとても立派な木で時の流れを感じさせられる本当に大きな木だった。この三亀亭をずっと傍で支えているような、共に生きているような印象をうける。この風水樹と亭を囲む樹林帯、そして三亀亭という要素がこの場所の優しく暖かい空間を作り出しているのだと感じられるほどにとても良い空間であった。誰かを想い、つくりあげた建造物がこの土地の良さを引き出しているのかもしれない。

写真８　三亀亭正面より

写真９　三亀亭入口方向

写真１０　三亀亭横の風水樹

■2012/3/28　河回村

風水理論における地形の構成は，山・水・方位の三者によって成立するとされている。理想的な風水の地形とは，背後に高くそびえる山（＝主山）があり，前方に水流（＝水口）があり，周囲には四神砂と呼ばれる「玄武（北）」,「青龍（東）」,「白虎（西）」,「朱雀（南）」を表す地形（山・川・道・平地）があることとされている。この河回村では、「河回」の名が示すとおり、花川（洛東江上流部）が大きく屈回する地点にあり、三面が川に囲まれている。村の南には南山、村の北には芙蓉台と呼ばれる絶壁があり、風水的にも好条件に立地している村として有名である。また、風水では、気が集まるところを中心に周辺の地形を動物、植物、物等になぞらえることを「形局」という。河回村では、村の形が蓮の花が咲いた形と言われており、豊穣の象徴とのこと。また、船に沢山の荷物を乗せた形とも言われている為、沈まないように村には石を置かず（石で建物を作らない）土で作るようにしていたなど、風水思想が強く残っているようだった。中を歩いてみると、雄大に流れる川と壮大な岩山、穏やかな町並みがうまく融合している町であり、土壁や茅葺といった材質で作られた家々は現代の街並みを忘れてしまうほどのどかな風景であふれていた。圧迫感のない低い家々と、後ろにそびえたつ山。この二つの高低差がまとまり感を出しているように感じる。また、山と川にかこまれた風景が土地に守られているような安心感を与えていると考えられる。

今回の河回村視察では、「風水理論の吉地選定プロセスによって作られる集落の織り成す景観」という前年度の当方の研究に大きく関係する場所ということもあり、改めて風水から生まれる景観の良さというものを感じさせられた。今回の経験を今後の大会や来年度の修士論文を執筆するにあたって生かしていきたい。

写真１１　南山と河回村

写真１２　花川と芙蓉台

写真１３　河回村内側の風景

■2012/3/28　屏山書院

塀で囲まれた屏山書院は、外から見ていた印象では屋根の瓦しか見えず、仰々しい風貌かと思っていたものの、実際に中に入ってみると質素な作りで解放感を感じ、外に開けている印象を受けた。中に建設されている立教堂～晩対楼への軸が階段等を使いうまく高低差を出すことで、塀が中から見えないことが大きく関係していると考えられる。また、入口付近に建設された晩対楼は、この建物があることによって、全面に位置する山が近くに見えすぎず、ほどよい距離感を生み出す効果があるとのことだった。韓国では、外からみた外観が綺麗かどうかということは重要ではなく、内側からみた風景が美しく見えるように建設された建物が評価される。その為、この屏山書院は高く評価されており、韓国の建築学生の聖地となっている。写真１４は、立教堂からの眺めを撮影した写真であるが、晩対楼があることによって背後の山による圧迫感を感じることはなく、開放感を感じることが出来た。また、この開放感というものは、前を開き、横を閉じるという屏山書院の形も大きく影響していると考えられる。これは風水の理想的な地形とかなり類似する点ではないかと思われる。さらに、この屏山書院では、晩対楼の柱と柱の間を７つの窓とたとえ、前面には７つの窓、後方には３つの窓（立教堂の後壁にある窓）があると言われている。これは当方の推測であるが、建物の屋根・柱を枠組みにすることで、風景を一枚の絵のような見せ方ができ、この方法によって、見えない部分（切り取られた部分）が出来る。この切り取られた部分を人は想像力を働かせることによって補おうとするため、景色がより一層綺麗にみえるのではないかと感じた。このように、人工的に手をいれることで周りの地形にある自然物を更によく見せる。そのような効果が韓国では求められているということを知り、とても感動した。自然と木造建築の調和が大きく取り上げられる屏山書院であるが、「調和」だけではなく、「相乗効果」という点にも注目して深く考えていきたい。

写真１４　立教堂からの眺め

写真１５　７つの窓の一つ

写真１６　立教堂３つの窓

写真１７　屏山書院入口側

■2012/3/28　俗離山法住寺

川の音が常に聞こえ、空気も綺麗なことから自然を五感全てで感じられる場所であった。韓国八景の一つである俗離山に囲繞されており、沢山の建物が有る中で、敷地内のどこからでも山を見上げる事が出来るという珍しい敷地を持つ。また、俗離山法住寺に存在する五重塔は国内随一の木造多層塔である。日本の塔とは違い、ピラミッド型のような形をしており、敷地の中心軸の上にどっしりと立っている為、周りの山々の中心を担っているかのようにも感じられた。この塔と周りの岩山との対比が日本にはないダイナミックな風景を作り上げている。広大な敷地には石灯や石蓮池など様々な国宝があり、岩山だけでもかなりの迫力をうけるのだろうが、ここに法住寺が存在することで自然と韓国の建築美、歴史の調和が生まれていた。

写真１８　俗離山法住寺

■2012/3/28　釜山市内

高層ビルが立ち並ぶ市内。カーテンウォールが多く見受けられ、韓国の都市としての発展を表しているように感じられた。曲線を使ったものや、ユニークな形をしたもの、様々な造形美をもったビルは遠くから見ても近くから見ても圧倒されるものばかりであった（写真１９・写真２０）。しかしながら、この市内の風景で疑問に感じたことは、屏山書院で学んだ「内から評価する美」というものである。高層ビルや都市の街並みは確かに現代の技術を感じとることが出来るが、内から見た風景はどうだろうか。今回、ビルに入り外を眺めるということは時間の都合上出来なかったが、はたして周辺の空間や風景は「どこにでも出来る風景」と化してしまってはいないだろうか。地形を読み取り、自然要素との兼ね合いを図り作られた建造物とはまた違う。ビルの集合地としての美しさというものも、もちろん綺麗で都市の一つの魅力だが、その建物自身としての美がかなり大きく反映してしまってはいないだろうか。これは釜山やソウルといった韓国だけの問題では決してなく、日本の東京や大阪など、どの国の大都市でも共通する問題である。今回の釜山市内の視察では、このように新たな問題点も湧き上がった。

写真１９　釜山市内ビル

4.　全体の感想と今後の抱負（半頁程度）

今回の韓国訪問では、「自然要素と人工物の織り成す景観」という点に着目して考察を行っていった。人間が生活するにあたって、この二つの要素から織りなされる景観というものは、ほぼ日常的に存在し、当たり前のことではあるが、相互の関係をもう一度見直すことで、より美しい景観を生み出す手立てとなることを今回、私は強く感じている。特に、屏山書院では建築物を建てることによってより周囲の景色を美しく見せるという、周囲の環境を最重視した計画がされているということを知り、感銘を受けた。建築というものは、その姿形そのものの美しさも重要であるが、その建物に住む人々から見える風景や、周辺環境との調和といった点にも気を配らなければならないと考えさせられる場所であった。現代の評価されている建築はどうだろうか。建築そのもののクオリティや美的センス、それらに評価の重心が置かれるような風潮になってはいないだろうか。私はその点に対してとても疑問を感じている。また、現代の技術を使えば周辺環境を変えていくことは決して困難なことではない。しかしながら、変えていくことで美しい環境を作っていくのではどこでもできる計画となってしまう。その場にある風景をいかに美しく見せ、そして建築物を建てることでどのような魅力をもった風景にしていくのか、これらをよく考え設計を行うことが、今後の建築には必要なのではないかと感じた。

上記のように、今回の韓国訪問で得られたものはかなり多い。この一週間で学んだことを今後の修士論文やコンペなど、様々なところで生かしていきたいと思う。